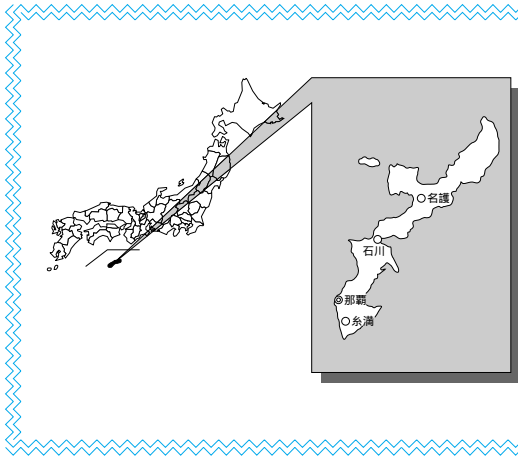


土木紀行

ざきみじょうあと 座喜味城跡

沖縄県中読郡読谷村



琉球国の誕生

14世紀の沖縄本島には中山・南山・北山という三つの小王国があった。大陸では明王朝が周辺国に朝貢貿易を促した時期で、沖縄本島からはまず1372年に中山の察度王が読谷村出身とされる王弟(泰期)を派遣し朝貢にふみきった。

その後、南山・北山もこれに続き、朝貢貿易は強力な王権を生み出す経済的基盤となり、三国が鼎立するが、ついに中山の巴志が1416年(1422年の説あり)に北山を攻略し、1429年に南山を陥落し、統一国家である琉球国を誕生させる。

二つの世界遺産を造った男・護佐丸

座喜味城はこのような統一国家形成中の15世紀

初頭に読谷地方を領有する護佐丸によって築かれた。護佐丸は当初、山田城(恩納村)に居城していたが、中山の巴志の北山城(今帰仁城)攻略に参戦し、攻略後は山田城から座喜味の地へ石材を運び築城した。

しかし、護佐丸はなぜか座喜味城には20年ほど居住しただけで1440年頃には本島東海岸を見渡せる中城城を改築し移り住む。

そこでは対岸の勝連半島の若き勝連城主・阿麻和利と対峙することとなり、皮肉にも両雄は琉球国の大交易時代の気概が込められた万国津梁の鐘が首里城に掲げられた1458年に激突し相倒れた。

この事件は護佐丸・阿麻和利の変として琉球史上においても忘れられない出来事で、阿麻和利の謀反説または貿易利権の争いの末の顛末ではなかろうかと言われている。



写真 1 上空から見た座喜味城跡



写真 2 城壁上から撮影

事件は18世紀初頭まで語り継がれており、仇討ち戯曲（組踊）の題材ともなった。護佐丸は名築城家と言われており、座喜味城と中城城の二つの城は「琉球王国のグスクおよび関連遺産群」として2000年にユネスコの世界遺産一覧表に登載された。

座喜味城跡を訪ねて

座喜味城跡のある読谷村は沖縄本島の中部西海岸の半島に位置し、城跡は標高127mの丘陵にある。座喜味城跡を訪ねてみると、なだらかな斜面の松林を通り抜け、まず大手門にあたる石造アーチ門が見えてくる（写真 3）。

門の天井はアーチ式で、弓なりに加工した琉球石灰岩の切石を左右から合わせてある。合わせ目中央部には「くさび石」がはめられ、他のグスクに類例がなく、現存する石造アーチ門では最古のものと考えられている（写真 4）。

城全体の石積みは「布積み」を主とし「相方積み」が併用されている。二の郭から13段の石階段を上り、同様な石造アーチ門をくぐると建物跡（正殿）がある一の郭となる。

発掘で見つかった建物跡（正殿）は石組の外枠が横16.58m、縦14.94mのほぼ方形の建物基壇となっている。上屋の詳細については絵図やその他資料が一切なく不明と言わざるを得ないが、瓦が一片も出土してないことから、屋根は瓦葺ではな

かったと言える。

次に一の郭から最高所の城壁に上る。眺望が良く、南は那覇から北は本部半島までの西海岸が見渡せる。上空から見ると城壁の造りがよく分かる（写真 1）。城壁の平面曲線は「平面アーチ」となっており、現在の黒部ダムの構造に似ており、約600年前の土木建築技術には驚かされる。

城壁の流れは城内に向かって凹んだ曲線、つまり「平面アーチ」の組み合わせになっている。平面的流れの方向を変える個所でアーチの支点の機能を持たせた「節目」を設けてあり、外敵を見張れる場所にもなっている。

城郭全体がこのような「平面アーチ」を組み合わせ、統一された形となるのは、座喜味城の大きな特徴である。また、「節目」での石垣の角は丸く面取りされており、隅角に集中する応力を小さくするためであるという。

自然と歴史豊かな読谷村

読谷村にはここで紹介した世界遺産座喜味城跡のほかにも人間国宝を育んだ古陶器喜名焼や読谷山花織があり、現在も陶器や織物の伝統工芸にたずさわる工房がたくさんある。また夕暮れになるときれいな夕日を見ることができるともビーチもあり、自然と歴史が自慢の村である。

ぜひ沖縄へお越しの際は読谷村へお立ち寄りいただきたい。



写真 3 大手門



写真 4 くさび石